オオスカシバ

前川美和

「お父さん、この木に大きい青虫がいるよ」
九月のはじめ、まだ暑い朝のことだ。庭のくちなしの木を指さして、四歳になったばかりの圭が大きな声を上げた。圭は虫が大好きだ。
「ほんとだ。丸々太った青虫だな」
「あっ、ここにも、ここにも。大きいのがもう一匹と小さいのが二匹いるよ。ねえねえ、飼ってもいいでしょ？」
「放っておいたら、くちなしの葉っぱ、全部食べられちゃうからな。くちなしから取ってやったほうがいいかもな。虫かご、持っといで！」
「はあい」
圭は急いでプラスチックのケースを持ってきた。洋は家の中に向かって声をかけた。
「ミチル、小さいビン、ないか？」
大きなおなかを抱えた妻のミチルがジャムの空ビンを持って、顔をしかめながら、庭に降りてきた。
「うわっ！　気持ち悪。そんなおっきい芋虫、飼うの？」
「圭が飼いたいって。このビンに水を入れて、くちなしの枝、何本か差して、幼虫、入れてやろう。こいつらいっぱい食べるぞ」
幼虫をケースに移した圭は優しくその背中を撫でている。
「圭、あんまり幼虫、触っちゃだめだよ」
「うん。どんなチョウになるのかな」
一家の主、瀬川洋は高校の美術講師をして五年になる。東京の有名な美術大学を卒業し、画家を目指しているが、現実は厳しい。
洋は三、四歳の頃から紙と色鉛筆かクレパスがあれば、一人で何時間でも遊んでいるような子どもだった。そのころ描いた絵を見ると、サカナやカニや乗り物がカラフルな色遣いで描かれていた。絵を描く楽しみが伝わってくるような絵だった。高校の時、美術部の先生から勧められると、当たり前のように美大を受けた。しかし、入学してみると、絵のうまいやつがいっぱいいることにショックを受けた。だれもが自分より優れているように感じた。美大では自分の絵を見つけることが重要視される。洋はシスレーやピサロのような自然を写し取った風景画を好んで描いたが、現代のアートシーンでは時代遅れの感は否めない。賞を取る学生の絵は洋の目から見ると、抽象的で、まるでデザインやイラスト、あるいは記号のようで、心を動かされるものではなかった。名のある美大を卒業しても、絵で食べていくのは難しかった。居酒屋でバイトをしながら、細々と描いていたが、なかなか認めてもらえず、バイト先で知り合った三歳年下のミチルとの結婚を機に、生活の安定も考えて、高校で美術を教え始めたのだ。
今年の五月、洋が顧問を務めている美術部に村井かすみという三年生がフラリとやってきて入部したいと言った。美大を受験することにしたが、時間がないので、合格のためのテクニックを教えてほしいとのことだった。まず、かすみの力を知るために石膏デッサンを課した。油絵を描いていた部員たちは、いきなり入部してデッサンを始めたかすみを驚

きの目で迎えた。そして、長い髪をかき上げながら、一心に木炭を動かすかすみの白い横顔に好奇の目を向けるのだった。

自由に描かせた石膏デッサンは一つ一つのパーツの形はよく描けていた。ただ、ディテールにこだわるあまり全体的なバランスが狂っていたし、光が描けていなかった。デッサンを早く正確に描くには、物差しなどを使って、顔の縦と横のバランスや、各パーツの位置関係を素早くつかむことと、立体的に見えて、かつ、存在感を持つように光がどちらから当たっているか、そして、一番明るいところから一番暗いところまでの明暗のグラデイションをしっかりとらえることが大切だと助言した。かすみは飲み込みがはやく、すぐにコツをつかみ、二か月ほどで位置のきっちり決まった存在感のあるデッサンが描けるようになっていた。

長い夏休みもそろそろ終わりを告げようとする日曜日、いつも幼虫の観察をしている圭が悲しそうな顔で訴えた。

「お父さん、一番おっきかった幼虫が茶色くなって、ケースの下にひっくり返ってるよ。死んじゃったのかな？」

「どうかな？　葉っぱ、毎日新しいのあげてたよな？」

「うん。どうして死んじゃったんだろ？」

「うーん、ケースの中暑かったのかな？　日陰に置いてたけどな。ケースから出して、木の下に置いといてやろう」

「あとの二匹は元気だよ。葉っぱをモリモリ食べてる」

圭は幼虫を見続けた。

九月に入ったばかりの部活の日、かすみは自宅で描いた水彩画を学校に持ってきた。木や花や草、室内、何気なく切り取られた景色は、確かなシンプルな線と青緑を基調とした独特の色遣いで楽しそうに描かれていた。洋はそこにかすみの絵画センス、色彩感覚の卓抜さを見ていた。彼女の絵の持つエネルギーは見るものを感動させずにはおかなかった。洋はまぶしい才能を前にして、それにまみえた喜びを感じる一方で、己への深い失望を味わっていた。他の部員も色が踊っているようなかすみの絵に目を丸くしていた。

九月も半ば、心も体も夏休みから通常生活に戻りつつある日、洋が家に帰ると、圭が報告した。

「もう一匹、茶色になっちゃった。朝まだ動いていたけど、今見たら、ケースの底りはっぱの下でじっとしてる」

「死んだんじゃないかもしれないね。ちょっと見とこうか」

「うん」

しばらくすると、幼虫は葉とケースの間にクモの出す糸のようなものを張っていた。そして、数日経つと、黒いサナギになっていた。

「死んだんじゃなかったんだ。サナギになったんだ。どんなチョウが出てくるのかな」

圭の心はチョウとの対面でいっぱいだった。

十日ほど経った朝、保育園に行く用意をした圭が騒いでいる。

「お父さん、出てきたよ。きれいな虫だよ。見たことあるよね」
「庭によく飛んで来ていたね。卵を産みに来てたんだね。透明の羽で黄緑のぷっくりしたお腹、短い毛が生えているね。図鑑でなんていう虫か調べよう」
「うん、図鑑、持ってくる」
図鑑で見つけた虫の名前は「オオスカシバ」。ホバリングしながら花の蜜を吸う昼行性のガとあった。
「これはオオスカシバっていうガだって。ガは大体夜に飛ぶけど、オオスカシバは昼間に飛んで、蜜を吸うらしい。大きなハチにも見えるね」
「なんか可愛いね。逃がしてあげるよ」
圭はケースのふたを開けて、オオスカシバを手の平でに包み込むと、庭の花の上にそっと置いてやった。
十一月になると、産み月の妻は圭を連れて、実家に帰ってしまったので、休日することのなくなった洋はキャンバスに向かう時間が増えた。画家になる夢は捨てたわけではなかったのだ。洋は以前訪れ、心を動かされた山道を撮った写真を手に取った。様々な緑の重なりと光の遊び、そこに立ったときの鮮やかな印象を思い出しながら、目に焼き付いた感動を表そうと筆を動かす。絵を描き始めると、時間を忘れる。気が付くと、部屋が薄暗くなっていた。そして、絵の色もなぜか暗く沈んだ調子になっていた。そこにはみずみずしい緑がなかった。
かすみは最近絵を描くのが楽しくなってきた。特にいろいろな色を置いていく過程がたまらなく幸せだ。的確なアドバイスをしてくれる先生のおかげだと思う。かすみは長身で手足の長い洋を思い浮かべていた。眼鏡の奥の少し青みがかった目はいつも生徒たちを包み込むように優しかった。かすみはいつしか洋に憧れを抱き始めていた。自分がもっと上手になれば、先生も喜んでくれると思い、家でも時間があれば、スケッチしていた。今日も自分の部屋の観葉植物を描いていると、「ご飯ですよ」という母の声が聞こえた。母と言っても、実母が三年前四十という若さで、バイク事故であっけなく死んでしまったあと、父が再婚した相手ということになる。
父、昌三は大手都市銀行の支店長として忙しい日々を送っていたが、休日には家の近くのインドア・テニススクールでテニスを楽しんでいた。その初級クラスに通う六人はとても仲が良く、新年会や忘年会、暑気払いのビアガーデンなどと、スクールの外でも交流していた。その中に後の妻となる絵美子がいたのだ。昌三が絵美子に初めて出会ったのは、絵美子がまだ二十代だった。細いしなやかな体で力強いストロークを打った。ショートヘアでコートを軽やかに走り回る姿に、若いっていいなあと目を細めて眺めていただけだったが、妻の早苗が死んでから、昌三と絵美子は急速に近づいた。妻の早苗は頭のいい仕事のできる看護師だったが、少しふっくらとした容貌は、会う人ごとに安心感を与えるようなタイプだった。絵美子はといえば、大学を出てから、薬剤師として働いている女性で、知性と自信が顔に現れていた。話題も豊富で、絵美子と話していると、心が浮き立ち、元気になれた。昌三の目には、妻とは全く異なる絵美子という女性が新鮮で可愛く映った。そして、妻の死から二年ほどして、絵美子を新しい妻として迎えることになったのだ。
一人娘のかすみは両親の愛情をたっぷりもらって成長した。大好きな父と母に見守られ、思いっきり甘えて育ってきたのだ。そんなかすみにとって、突然の母の死は衝撃だった。

そして、その喪失感はかすみを無口で内省的な子に変えてしまったが、父と寂しさを共有することによってなんとか生きてきた。ところが、父が再婚して、新しいパートナーを得たことで、かすみは以前のように父に甘えることができなくなった。

今日は休日なので、父も昼ご飯の食卓についている。

「また絵を描いてるのか？」

「うん」

「何を描いてるんだ？」

「わたしの部屋にある鉢植えの…」

「ああ、スパティフィラムか。あんなのが絵になるのか？」

「何でも絵になるわ。石ころでも廃材でもおもしろい絵になるのよ」

「ふーん。楽しそうだね」

笑顔で父と話していたかすみはテーブルの向かい側に座っている絵美子の視線を感じた。笑顔を作っているが、目は笑っていない。

「いただきます」

かすみはナスとトマトのスパゲティーをフォークでつつきながら、最近煮物やお浸しを食べていないなと思った。絵美子は料理は上手だけれど、母の作ってくれたようなかぼちゃや里芋の煮っ転がしやホウレン草のお浸しなどは作らなかったのだ。さっさとスパゲティーを食べ終わると、「ごちそうさま」と言って、自分の皿を洗った。

「じゃ、絵の続き、やってくるね」

階段に足をかけたとき、絵美子の顔がパッと輝くのを見た。心の中で邪魔者退散とつぶながら、お父さんももっと大人と再婚してほしかったなと恨めしく思った。

かすみが自分の部屋に戻ると、食卓に残った昌三は絵美子に尋ねる。

「かすみとはうまくいってるのか」

「さあ、かすみちゃんはニコニコしてるけど、何も大切なこと話してくれないわ。進路とか友達関係とか。お母さんとも呼んでくれないし」

「一人っ子で甘やかしてきたからね。思春期でもあるから、難しいだろうね。お母さんというより、お姉さんのようなかかわり方を目指したほうがいいのかもしれないね」

「そうですね」

「ところで、ボーイフレンドとは仲良くしてるのかね」

「そういえば、このごろ姿を見ませんわ。どうしたんでしょう？」

「まあ、かすみが元気そうだから、心配することないか。三人で暮らし始めて、まだ一年しか経ってないんだから、すぐ家族になれるわけがないよ。根気強く見守っていくしかないね。絵美子もやりにくいだろうけど、よろしく頼むよ」

「ええ」

夫婦は昼から一緒にテニスに出かけた。かすみは「行ってくるよ」という父の声を聞きながら、絵美子をお母さんとは呼べないだろうなと思った。産んでくれたのでもないし、育ててくれてもいない。母の死んだポジションにいきなり入ってきた人をどうしてお母さんと呼べるだろう。悪い人じゃないし、仕事も家事もしっかりしているとは思うが、女の部分が見えすぎて、戸惑うことも多いのだ。

描きかけの絵を前に鬱々していると、携帯が鳴った。智樹からのメールだった。智樹は

かすみが高校一年生の時、教育実習生として生物を教えてくれた。普段の生物の時間は目を開けたまま、眠っていることが常だったが、若くてエネルギーにあふれた智樹は小さな実験や顕微鏡観察などを授業に取り入れて、生徒を動かし眠らせてはくれなかった。活気のある授業をしたので、実習が終わるのが残念だった。女子生徒の中にはたくましくて精悍な智樹のファンになった子もかなりいた。その智樹にかすみは二年生になった夏休み、駅前の本屋でばったり再会した。スターバックスに入って、いろいろな話をした。

「先生は今何を…」

「四月から講師として生物教えてるんだ。かすみちゃんはそろそろ進路とか決まった？」

「うん。迷ってる。家を出るかどうか。母が二年前に死んで、父と二人でやってきたんだけど、その父が一回りも若い人と再婚したの。わたし、その人、ちょっと苦手で…」

「難しいね。どう付き合っていくか。実の親と理解しあうのも大変なのに…」

「先生とこも何か問題あるの？」

「ああ、うちは父が医者なんだ。だから、親は僕も医者になるのが当然のように思ってた。医学部に入るためのレールの上を走らされてきたんだけど、ある日ふと気が付いたんだ。医者の仕事って何だろうって」

「病気の人を治してあげるんでしょ」

「そうかな。軽いけがや病気なら治せるかもしれない。ていうか、そういう場合は医者が関与しなくしても自然治癒する可能性が高い。じゃ、重いけがや病気の場合はどうだろう。どんな処置をしたところで、少々の延命にしかならないんじゃないか。つまり、医者は患者を死にいざなう役目を負うことが大きいように感じたんだ。僕はそんなに強くない。何人もの死と対峙していく覚悟ができなかった。それで、教育を通じて未来ある子どもたちと関わっていきたいと思ったんだ。でも、父には僕が軟弱な負け犬に見えるようだ」

二人はポツリポツリと互いの悩みを語り合い、時間が飛ぶように過ぎた。最後にメールアドレスを交換して別れた。

それ以来、時々会っては近況を報告し合い、映画を見に行ったり、遊園地に出かけたりと付き合う形になっていた。二、三回、かすみのうちに来て、晩御飯を一緒に食べたこともあった。しかし、かすみが三年生になって、美大に進むことを決めて、洋の指導を受け始めてから、かすみの関心は絵と洋に移りつつあった。それで、ここ二か月ほど智樹からのデートの誘いをいろいろな理由をつけて断っていたのだ。かすみはメールを開いた。

「家に一人でいるんだろ？　家の前まで来てるんだ。どっかドライブに行こうよ」

窓から覗くと、智樹の青い車が見える。父たちが出かけるのを見てたのかしらと少し気味が悪くなったが、覚悟を決めると返信した。

「家の前にいるんだったら、入って来て。話があるの」

かすみが下に下りてくると同時に、玄関のドアが開いた。暗い顔をした智樹が立っていた。

「話って何？」

「まあ、上がって。おいしいコーヒー淹れるから」

智樹をリビングに通して、かすみはコーヒーメーカーをセットし、彼と向かい合ってソファーに腰かけた。智樹の目がかすみの話を待っていた。

「わたし、東京の美大を受験しようと思ってるの」

「家から通える神戸大って言ってたよね」
「家を出たいの。みんなのためにも」
「みんなのため？」
「父と絵美子さんとわたし、三人の生活ってやっぱりお互い気を使ってしんどいのよ。父と彼女を二人だけにしてあげたほうがいいと思う。東京の大学で学ぶために家を出るっていうのが説得力あるし、自然でしょ？」
「かすみが遠慮して出ていかなくてもいいんじゃない？」
「わたしのためでもあるのよ。デッサンの勉強を始めて、本当に絵を描くのが好きになってきたの。形や光をとらえたり、いろんな色を置いていくのも楽しい。大学に行って、もっと様々なジャンルの絵に触れたいし、もっと描きたい」
「そうか。やりたいことが見つかったんだね。大抵の人は一生見つけられずに死んじゃうか、そんなこと考えもせず、考える余裕もなく人生を終えるんだからな。僕自身本当に先生を続けたいのか時々分からなくなるよ」
　かすみはコーヒーを入れるために立ち上がった。カップにコーヒーを注ぎながら、寂しそうな智樹の横顔から目を背けるように、コーヒーカップをテーブルに置いて言った。
「でね、絵を描くことに集中したいの。今が勝負だから」
「僕の存在が邪魔なのか？」
「今の私は智樹の心に寄り添う余裕はないの」
「そうか。かすみの人生を左右する大切な受験だもの、邪魔はしないよ」
「ありがとう」
「邪魔はしないけど、かすみのことを遠くから見守るのはいいだろう？」
「智樹は智樹の道をしっかり歩いて行ってほしい。恋愛なんて一過性のものよ。わたしは私の道を探すから」
「決別宣言のようだな。かすみは僕にとって特別な存在なんだ。年下だけど、対等に心を開いて、自分の言葉で話せる大切な人だから、守りたいんだよ」
「誰も他の人を守ることなんてできないわ。自分自身だって守り切れないのに。それに、わたしはそんなに弱くない」
「僕は、かすみとの出会いは特別なものだから、二人の関係をゆっくり育てていきたいと思ってた。かすみが僕と別れて、他の奴と一緒にいるなんて、考えただけで、頭がおかしくなっちゃうよ」
「架空の彼氏に嫉妬しているの？」
「それぐらい僕はかすみのことを…」
　智樹は絞り出すように、それだけ言うと、いきなり立ち上がって部屋を出て行った。玄関のドアの閉まる音が響いた。かすみは智樹の強くまっすぐな思いを受け止めかねていた。また、そこに彼の執着心を見たようで、心がざわついた。

　数日後、かすみが美術部の部室に入ると、そこには誰もいなかった。ホワイトボードにスケッチをしに河原に行きますと伝言があった。かすみもスケッチブックを手に急いで河原に行った。部員たちがあちらこちらで自分の切り取った構図の前で鉛筆を動かしていた。かすみもどこで描こうかと河原一帯を眺めた。そのとき河原の上の道に青い車が止まって

いるのが見えた。かすみはその場を動けなくなった。青白い顔で放心したように突っ立っているかすみを見て、洋が駆け寄った。
「どうした？　気分でも悪いのか」
「先生、あの青い車、ずっとあそこに止まっていたの？」
「みんなと来た時には気づかなかったな」
話を聞いていた部員の一人は言った。
「あの車、今来たばかりだよ。僕、あの車が走って来たの見たよ」
「あの車がどうかしたのか？」
「ちょっと知り合いの人の車に似てるから」
三人が見つめていると、青い車は走り去った。
かすみはその日、スケッチもそこそこに早めに家に帰った。珍しくドアに鍵がかかってなかった。恐る恐る入って居間を見ると、ソファーに絵美子が横たわっていた。
「あら、かすみちゃん、帰ってきたの」
「どうしたの？」
「ちょっと具合が悪くなったから、早退してきたの」
「熱は？　お薬、飲んだ？」
「熱は八度一分。咳も出るから、風邪だと思う。薬はさっき飲んだわ」
「晩御飯はわたしが作るから、寝ておいて。ベッドで寝たほうがいいと思うよ」
「ありがとう。じゃ、寝てくるわ」
絵美子は重い足取りで二階の寝室に引き上げた。かすみは一息ついてから、冷蔵庫を開けて、食材をチェックした。カボチャとホウレン草とネギ、それに、豆腐が入っていた。卵もたくさんあったので、カボチャの煮物とホウレン草のお浸し、出汁巻き卵と湯豆腐を作ることにした。かすみは、母が休みの日、二人でよく晩御飯を作ったので、料理は嫌いではなかった。出汁巻き卵は出汁を入れ過ぎて、壊れかけていたし、カボチャは少々煮崩れてしまったけれど、味には自信があった。
晩御飯には熱の下がった絵美子と早く帰宅した昌三と三人でテーブルを囲んだ。昌三は食卓を見て、「今日は和風だな。珍しい」と言いながら、カボチャを一口食べて、
「おいしいね。なんかホッとするな」と笑顔になった。
絵美子はこわばる顔に笑顔を張り付けて、明るい声を出した。
「今日はわたし、体調がよくなかったので、かすみちゃんが作ってくれたんですよ」
「そうか。それで、懐かしい味がするんだな」
「亡くなった奥様の味、ですか？」
「えっ、まあ」
昌三は絵美子の顔が能面のように冷たい表情をしているのに気が付いて、かすみに視線を移した。
「たまには和もいいね。かすみも腕を上げたな」
いつもいつも過剰に反応する絵美子と、そんな絵美子に気を使う父の姿に、かすみは少しいらついた。
「時間があるとき、お母さんが教えてくれたから、和食には自信があるのよ。お母さんは和食が好きだったわ」

絵美子は視線を落として言った。
「かすみちゃんはわたしのこと、お母さんって呼んでくれないのね」
「気を悪くしないで聞いてね。わたしがお母さんと呼べるのは一人だけです。わたしを産んで、中学生になるまで育ててくれた人。わたしはもう高校生だから、お母さん的な存在は必要ないの。一人で考えたり、動いたりできるから。絵美子さんはお父さんのパートナー。わたしの母親にはならなくてもいいんです。父を大切にしてくれれば十分」
「かすみちゃんはそんなふうに思ってるんだ」
「わたしにとって、お母さんって言葉は死んだ母そのものを指す大切な言葉なの。ごめんなさい」
昌三はテーブルに置かれたかすみの手に自分の手を重ねると、絵美子に優しく言った。
「不本意かもしれないが、かすみの気持ち、分かってやってほしい」
絵美子は目の前の重ねられた手を一瞥すると、「分かりました」と小さな声で答えた。
静かな食事が終わると、昌三は書斎に入り、かすみは片付けに立った。流しで食器を洗っていると、絵美子が後ろから叩きつけるように言った。
「いろいろ理屈並べてるけど、結局わたしのことが嫌いなんでしょ？　大好きなお父さんを取られて」
驚いたかすみは言葉を詰まらせた。
「お父さん、取られてないし…。じゃ、絵美子さんに聞くけど、絵美子さんはわたしを娘だと思えるの？　産みもしてない、育ててもいない、何の思い出も共有しない十六になる女を自分の娘と見ることなんて無理でしょ。あなたはいつもわたしをライバルだと思ってる。美大に合格したら、この家、出ていくから、もう少し我慢して。絵美子さんは父、昌三の妻になったの。わたしの母親になったんじゃないの。」
「そうね。そうなのね」
うなずく絵美子を見て、かすみはやっと分かってもらえたとニッコリした。その笑みを継母は嘲りととった。

十一月に入ると、美術部では素材の描き分けの練習を始めた。ビンやグラスのようなガラス、コーヒーカップや花瓶などの陶器、柔らかい布をモチーフにして、その質感が出るように何枚も描いた。他の部員も同じ題材に熱心に取り組んでいる。洋は生徒たちに明暗に注意するよう促した。
「西洋絵画では光が描けないと、平たい絵になってしまう。立体感が出ないんだ。よく見て、どこが一番明るいのか、暗いのかつかんだら、それを繋いでいくんだ。いくつかの面でとらえていくといいよ」
生徒たちは透明なビンを前にして、口々に「先生、面でとらえるって分かんないよ」と口を尖らせながら、一生懸命目を細めて、光をとらえようとしている。
「うわあ、かすみちゃんの絵、おもしろい」
「構図が変わってるね」
皆がかすみの絵の周りに集まってきた。かすみはビンを上から見た図になっていた。かなりデフォルメも入っている。洋はその独創性に感心したが、絵に嘘を見た。
「着眼点はユニークでおもしろいし、作品としては良く描けてる。ただ今は正確に形や質

感をつかむ練習をしよう。基礎がしっかりできてこそ遊びを入れたり、抽象的な表現ができるようになるんだ。形や色をしっかり捕まえることができないまま、抽象的なものに進んでも、底の浅くて、見ててすぐ飽きるようなものしか生み出せない。今は受験もあるから、誤魔化さないで、しっかり見て描くことを優先させたほうがいいよ」

かすみは素直にうなずいた。皆も納得してスケッチブックに向かっている。絵に集中する緊張感のある静けさがしばらく続いた。そんな中、部員の一人が思いついたように声を上げた。

「先生、赤ちゃん、生まれたの？」

「うん、十一月八日に女の子が生まれたんだけど、ちょっと小さかったんだ。だから、赤ちゃんの退院が延びちゃって」

「じゃ、まだまだ帰って来ないの？」

「そうなんだ。十二月の初めにこっちに帰るくる予定だったけど、無理みたい。正月は僕も妻の実家で過ごすことになりそうだ」

「えーっ！　先生かわいそう。ずっと一人？」

「まあな」

「クリスマスも一人か…。じゃ、先生のうちでクリスマスパーティーやろうよ。」

思いがけない提案に他の部員も乗り気になった。

「いいね。一人ぼっちの先生を慰めてあげよう」

「わたし、クッキー焼くわ」

「アイスクリーム、買って行こうかな」

生徒たちのテンションに圧倒されつつ、洋は言った。

「おいおい、いいけど、僕はまともな料理作れないぞ。ケンタッキーとかピザでいいのか」

「上等、上等。俺ら、飲み物調達します」

そして、一か月後の二十日、ちょっと早めのクリスマスティーが行われた。洋は朝から居間のテーブルに散らかったカップ麺やコンビニ弁当の残骸を処分し、掃除機をかけ、たまった洗濯物を洗って干した。生徒が夕方に来るというので、それまでにチキンの空揚げを買い込み、ピザ屋に予約の電話を入れた。五時前になると、生徒が集まってきた。

洋は普段生徒の制服姿しか見ていないので、私腹を着た子供たちはなんだか大人びて見えた。特に女の子たちは華やかなオーラを放っていた。真由美とかすみが自分で焼いたというクッキーとシュークリームを差し出すと、みんなの歓声が上がった。食べ盛りの子どもたちの食欲はすさまじかった。チキンにかぶりつき、ピザを頬張り、よくしゃべった。

「かすみは美大に行って、何勉強するの？」

「油絵だけじゃなくて、水彩とかパステルとか、いろんなもので描いてみたい。画家になれたらいいなあって」

「へえ、画家か。なるの難しいんじゃない？　ねえ、先生」

「うん、絵で食べていくのは大変だろうね。美大では基礎的な技術は特に教えてくれないんだ。自分で自分を高めていかなくちゃね。そして、自分にしか描けないようなオリジナリティーのある絵を見つけることが課題だね。人の描かない絵を出さないと、賞に入らないからね。でも、賞をもらった作品の中にはどうかなって思う絵もある。インパクトあるけど、気味が悪いのとかね」

「わたしはかすみみたいに才能がないから、教育学部の美術専攻になって、学校の先生になりたいなって思ってる。生活していかないとだめだし」
「俺は専門学校に行って、アニメーションの勉強するんだ。スタジオジブリみたいなところで、アニメ作りに携わりたい。みんなで作り上げるって楽しそうだろ」
「わたしは舞台美術みたいなことやりたいんだけど、やっぱり美大行かないとだめかな。うち、そんなお金ないと思う」
「専門学校でも勉強できるんじゃない？　俺の志望してる専門学校にも、そんなコースあったんじゃないかな。ネットで調べたら？」
　みんな食べたり、しゃべったり大忙しだ。洋も自分の体験を踏まえて語った。
「僕も画家になりたかった。今だって諦めたわけじゃないよ。ただ僕の描きたい絵は今の時代には合わないもののようだ。心に残ったワンシーンや素直に感動を覚えた風景を切り取って、描いただけでは認めてもらえない。現代はポップで軽くてキャッチ―なものか、奇をてらった作品が好まれる傾向がある。それに、絵の世界にも派閥みたいなものが存在している。〇〇賞にが欲しかったら、××先生に師事しないとだめだとかね。いろんなところで権威か顔を出す。ただ、本当に素晴らしいものを創り出せば、一人、二人と認めてくれる人が出てくるものだ。本当に表現したいものを魂を削って創る努力を続けていれば、どんな形になるか分からないけど、必ず努力は結実すると信じている。君たちは若いんだから、どんどん挑戦していってほしい」
　みんな、洋の語る一言一言をしっかりと受け止め、創作への思いを熱くするのだった。かすみも尊敬のこもったまなざしで洋を見つめていた。
「さあ、デザート、デザート！　真由美のクッキーとかすみのシュークリームがあるぞ」
「やったあ！」
　皿に盛られたスィーツにあちらこちらから手が伸びる。
「しかし、よく食べるな。おまえら」
「成長期だもん。スィーツは別腹だし」

　気の置けない仲間とのクリスマスパーティーからかすみが帰宅したのは九時を回った時間だった。父が居間でくつろいでいた。
「遅いね」
「うん、クラブのクリスマスパーティーがあったから」
「まだ二十日だよ」
「クリスマスはみんな予定あるし。先生のお宅に集まったの」
「へえ、今どき珍しいね。生徒を自宅に呼ぶなんて」
「先生、奥さんが赤ちゃんを産みに実家に戻ってるから一人なの」
「そうか。クラブの先生って、美術の教科も教えてくれるのか」
「そうよ。瀬川先生っていうんだけど、とってもいい先生よ。一生懸命指導してくれるし、美大のこともいろいろ教えてくれるの」
「それはよかったね。そうそう京都美術館で印象派展やってるよ。今度の休みにでも見に行くか」
「行く、行く。色と光が素敵だもの」

「日本人はルノアールやモネに代表される印象派が好きだから、混んでるかもしれないね」
「でも、本物が見られるんだから」
そこへ風呂から上がった絵美子が入ってきた。
「あら、かすみちゃん、帰ってたの」
「あ、絵美子、かすみと話してたんだけど、今度の日曜、京都で開かれてる印象派展、おまえも行くだろ」
「日曜日ですか。その日はお昼に、友達と会う約束あるから…。お二人で行って来てくださいな」
「そうか。それなら仕方ないな」
絵美子は暗い目をかすみに向けると、冷蔵庫から缶ビールを出して、一気に飲むと、その間を握りつぶした。かすみはその時はっきりと感じた。この人はわたしに嫉妬している。娘に注がれる父親の愛に嫉妬している。父を独り占めできないもどかしさにイラついている。かすみはやりきれない思いで二階の自分の部屋に逃げだ。ベッドに仰向けに倒れこむ。突然鳴ったメール着信の音にビクッとした。メールは智樹からだった。
「こんな時間まで何してたの？　新しい彼氏でもできたのか？　夜道の一人歩きは感心しないな」
かすみはカーテンの隙間から外を見た。家から少し離れた公園の脇に青い車が見えた。
「ストーカーみたいなこと、やめてよ」と返信すると、
「かすみのことが心配なだけだよ。何も危害は加えてないだろ」
「わたしのことは放っておいて。あんまりしつこいと、警察に言うわよ」
「警察がこれくらいのことで動いてくれるわけないだろ」
あの爽やかで頼もしい智樹はどこに行ってしまったのだろう。かすみは智樹の心が壊れつつあるのかと不安を募らせた。しばらくして、外を見ると、もう青い車はなかった。

クリスマスイブ、かすみの家では銀行から帰った昌三が一人居間でテレビを見ていた。半時間ほどすると、絵美子がケーキを抱えて帰ってきた。
「あら、帰ってらしたの？　ケーキ、買うの忘れてて…」
「かすみはまだ帰ってないよ」
「かすみちゃん、買い物に出かける前に七時までには帰るから、みんなでご飯食べようねって言ってたんですよ。そのうち帰ってくるでしょう」
絵美子はそう言うと、サラダを作り始めた。
九時半を回った。食卓には鶏肉やサラダやパンが準備されている。昌三が重い口を開い

た。
「何の連絡もないなんて変だな。かすみの友達の電話番号、分かるか？」
「かすみちゃんの友達の連絡先は全部かすみちゃんの携帯に入ってると思うわ。わたしは…。あっ、ちょっと待って。美術部の顧問の先生の電話番号はどっかにあったはず」
引き出しを掻きまわすように探していた絵美子は瀬川洋の番号を手にしていた。昌三はひったくるように受け取ると、深呼吸をしてから、番号を押していく。
「夜分恐れ入ります。美術部でお世話になっている村井かすみの父親です。早く帰ると言って家を出た娘がまだ帰ってこないので心配しています。先生、何かご存知ないですか？」
「えっ！　も、もう十時ですよね。それはご心配でしょう。わたしは…クリスマスパーティー以来、かすみちゃんとは会ってませんが…。今からクラブの生徒たちに尋ねてみます」
「そうですか。それはありがたい。友達の連絡先も分からず、困っていたんです」
「何か分かり次第、お電話します」
「よろしくお願いします」
小一時間ほどして、洋から連絡があった。
「何人かはかすみちゃんが今日ロフトに買い物に行くって聞いてたようですが、一緒に行ったり、姿を見かけた、生徒はいませんでした。かすみちゃんは連絡もしないで、家を空けることがあるんですか」
「いえいえ、そんなことは一度もありませんでした。事故か事件に巻き込まれたのかもしれません」
「やはり警察に届けたほうがいいんじゃないですか」
「そうですね。そうします」
昌三は警察に捜索願を出した。その夜、かすみは帰って来なかった。
警察はかすみの年齢と家庭環境を鑑み、家出の可能性も捨てきれないので、事件、事故との両面から捜査をする方針を出した。家族や友達の証言から、智樹の存在も浮き上がったが、当日のアリバイにはっきりしないところはあったものの、生物の講師としてまじめに勤めていることと、かすみの影は半年ほど前から彼の周辺から消えていることから、捜査の対象から外された。捜査は一か月、二か月と続けられたが、何の手がかりもつかめていなかった。かすみと思われる死体も見つかっていない。

どうして死体が見つからないのか。あんな分かりやすい所に置き去りにしたのに…。不安で押しつぶされそうだ。かすみの細い首をこの手で絞めた。彼女の肌の温かみをまだこの手は覚えている。初めは手足をばたつかせていたが、顔色が見る見る紫色に変わって、ぐったりしてしまった。大きく開けた目がこっちを見ていた。涙が一筋こぼれていた。慌てて、手を緩め、体をゆすってみたが、かすみはされるがまま、人形のように揺れていた。なんてことをしてしまったんだろう。取り返しのつかないことをしてしまった。どうしたらいいんだろう。かすみの動かない体を呆然と見つめた。あんなに表情豊かで可憐だったかすみが紫色に染まって、空っぽの大きな目を剥いて転がっていた。
すぐに現実に引き戻されて、死体をどう処理するか考えを巡らした。今七時、外は真っ暗だ。車に乗せて、どこかに捨てに行くしかない。小柄なかすみでも死体となると、一人で運ぶのはかなり重い。旅行用のスーツケースを出してきて、なんとか詰め込んだ。車の

トランクに入れて、夜道を走り、無意識に山道に入っていた。三十分ほど走ったところに車を止めるスペースがあった。降りて、あたりを見回す。誰もいない。季節外れのか細い虫の音と木々の枝が風に吹かれてこすれる音がするばかりだった。トランクからスーツケースを引きずり出し、かすみの死体を出すと、木の下に静かに横たえた。雨がぽつぽつと降りだした。慌てて、スーツケースをトランクに押し込み、もと来た道を戻った。山道から出るところで、黒っぽい車とすれ違った以外他の車には出会わなかった。

それ以来、テレビのニュースや新聞に「女子高生の遺体発見」の記事を探した。毎日毎日目を皿のようにして、紙面の端っこにひっかかった三面記事にまで目を通した。下に投げ落としたり、ビニール袋に包んだりしないで、あんな中途半端な目立つ場所に置いてきたのに、何日も見つからないなんて考えられなかった。日に日に不安は募った。年が明け、春めいてくると、自分の犯したことが夢の中の出来事のように思えることもあったが、ともすれば、かすみの紫色に変色した顔が浮かんできた。

春は急ぎ足で過ぎ去り、また、夏が巡ってきた。

村井家では昌三と絵美子が遅い朝食を食べていた。絵美子は少し出てきたお腹を満足そうに撫でながら、遠くを見るような目で言った。

「かすみちゃんがいなくなって、もう八か月ですね」

「ああ、どこで何をしているのやら。わたしはどこかで生きていると信じているよ」

「そうですね。どっかで絵を描いているかもしれないわ」

体全体にふっくらと肉がついて、母親になりつつある絵美子は、同情を睫毛にたたえながら、励ますように、昌三の手を両手で包み込んだ。昌三は力なく微笑んだ。

「あなた、今日はベビーベッドや産着を揃えないと」

「そうだな。体調はいいのか」

「ええ、今安定期だから、大丈夫。食欲もあるし」

「そうか。しっかり食べないとな。今晩わたしが何か作ってやるよ」

「あなたが？」

「肉ぐらい焼けるさ」

「じゃ、お願いしようかしら」

そこには何気ない穏やかな日常があった。

智樹は今日教員採用試験を受けてきた。今回はしっかり準備したので、自信があった。講師として生徒たちとかかわっているうちに、教師を一生の仕事にしたいという気持ちが強くなってきた。これからの世界を担う子どもたちに生き物、ひいては生命のメカニズムの精巧さと神秘について教えていきたいと思う。それが子どもたちの心に生命への慈しみを培い、更に生命への興味につながれば、彼らの将来の選択に何らかの指針を与えることができるかもしれない。帰りに本屋に寄って、新学期の教材に使えそうな本を二冊買ってきた。自分の目標がはっきりしたことで、不安定だった心も落ち着き、父との関係も修復されつつあった。

洋には小さな家族が増えていた。去年の十一月に生まれたルナと名付けられた女の子は

そこら辺を這い回り、つかまり立ちしようと食卓をつかんでいる。
　庭に出た圭が叫んだ。
「お父さん、オオスカシバの幼虫がいるよ。大きいやつと小さいの。おいしそうに葉っぱ食べてるよ。また飼おうよ」
「そうだな。そのままにしとくと、くちなしの木、丸坊主になっちゃうからな。虫かごとビン、持っといで」
「お母さん、ビン、ビン」
　バタバタと家に駆けこむ圭。ルナがハイハイをして、玄関まで来て下りようとしている。思わず駆け寄って抱きかかえ、「あぶないよ。トーンするよ」と注意しようと怖い顔を向けたが、ルナは洋の顔を手で挟みながら、「キャッキャッ」と笑い声を立てた。ルナを抱っこして、くちなしの木を覗き込んだ。オオスカシバの幼虫が元気にモソモソ動いている。ふと視線を感じ、外に目をやると、信じられない人が立っていた。
「か、かすみ？」
「先生、ご無沙汰しています」
　村井かすみが笑っていた。少しほっそりとして、髪もショートにしていたが、まぎれもないかすみの姿があった。洋は驚きのあまり言葉を失っていた。足がガクガク震えていた。ルナが小さな手で洋の頬を叩きながら、「パッパ」と言ったので、我に返った。ビンを持って玄関に出てきたミチルにルナを渡し、「教え子が来たんだ。ちょっと公園に行ってくる」と言った。
「上がってもらえば」と言う妻に「散らかってるしな」と答え、玄関のドアを閉めた。虫かごを抱えた圭の何か言いたげな顔が一瞬見えた。
　洋は無言でかすみと並んで歩いた。公園の日陰になっているベンチに腰を下ろした。夏の公園には人っ子一人いない。乾いた砂場に目を落としながら、洋が口を開いた。
「生きていたのか」
「ええ、みんな、わたしが死んだと思っているんでしょうね。わたし自身もあの時死ぬんだって思ったもの」
「わたしがこの手で首を絞めて殺したんだ。ぐったりしてびくとも動かなくなった君を車で運んで、山に捨てた」
「先生、あの時雨が降ってたの覚えてる？　その雨でわたし生き返ったの。ていうか、もともと死んでなかったのかもしれない。仮死状態っていうのかな。それに、先生、ビニール袋に入れたり、土の中に埋めたりしなかったでしょう？　だから、雨で息をふきかえしたんだと思うの。意識は戻ったものの、どうなってるのか状況をなかなか理解できなくて…。どこか山の中みたいだけど、あたりは真っ暗で誰もいないし、一人でどうしていいか分からなくて、ボーっと座っていたら、青い車が来たの。智樹が出てきて、何も言わず、わたしを抱きかかえて車に乗せて、彼のお父さんの病院に運んでくれた。わたし、うっ血もひどかったし、声も出なかったから、一か月ほど入院させてもらったの。智樹はうすうす何があったか気づいていたようだけど、わたしが少しずつ話せるようになって事情を説明すると、警察に行って本当のことを話して、両親のもとに戻るべきだと言ったわ。でも、わたしはこのままの状態、死んだのか生きてるのか分からない状態でもう少しいたいと思った。みんながわたしのこと忘れてしまうまで…。先生のこと犯罪者にしたくなかったし、

家にも戻りたくなかった。心配かけてるの分かってたけど」
「君を殺そうとしたのに。どうして？」
「先生、イブの日のこと、覚えてる？」
「忘れるわけないじゃないか」
「そうよね。わたし、ロフトを出てから智樹の車につけられて怖くなった。たまたま先生の家の近くに来てたから、思い切って先生の家のチャイムを鳴らしたら、先生が顔を出してくれて、ほんとにホッとしたの。智樹のことや家のこと、いろいろしゃべったわ。先生はずっと聞いてくれた。そして、アトリエ、見せてもらったんですよね。初めて先生の作品を見た」
「そう。そして、君は言ったんだ。『先生、こんな絵、描いてるんだ』って。わたしはその時君の目を見た。『こんな』に失望と憐憫の色が宿っているのを知った。私の中で何かが外れた。気がついたときには夢中で君の首を絞めていた」
「わたしは意識を失いそうになりながら、首を絞めつけている先生の目を見た。そこには怒りと悲しみを湛えた真黒な穴があった。わたしは大好きな先生をこんなに深く傷つけてしまったんだと思うと、悲しくて、体から力が抜けてしまったの」
「わたしは君の才能が羨ましかった。柔らかな感性の赴くまま的確な線を引き、独特の色を作り、その色で自由に遊ぶ。わたしにはまねのできないものだった。絵を教えるにつれて、わたしは君の持つ審美眼を確信するようになった。そんな君がわたしの絵を見て、放った言葉、『こんな絵』にわたしは自分の限界を見た思いがした。わたしは君に嫉妬した。君の才能の前にうなだれた」
「先生の悲しみが手の平を通して痛いほど伝わってきたの。わたしは言ってはいけないことを言ってしまった。殺されても仕方がないって思った」
「いいや、君は正直な感想を言っただけだよ。わたしは自分の才能の無さに本当は前から気づいていたのに、自分が認められないのは、時代の潮流に合わないせいだとか、派閥に属さないからだと理由をつけて真実から目を背けてきたんだ。君の正直な目を見て、己のごまかしや薄っぺらいプライドが崩れてしまったんだ。それで、我を忘れて…」
「先生を責めるつもりはないの。わたしにも少しは芸術家の苦悩を想像することはできるから。それに、わたし、先生に指導してもらったおかげで、今美大で勉強できてると思ってるから。入院中に智樹が願書出してくれてて、今年受験して合格したんです。奨学金ももらえてるし、この前東京都主催の絵画展で奨励賞いただいてから、イラストのアルバイトとか入ってくるので、最近やっと自分で生活できるようになったの。で、いつまでも行方不明のままじゃ、先生にも家族にも済まないって思って…。先生、わたしは生きています。どうか心の重荷をおろしてください。長い間、放っておいてごめんなさい」
「ありがとう。来てくれて。わたしは…このまま生きて行ってもいいのか？」
「先生は先生にしかできないことがあるでしょう？　先生はこれからも絵の好きな生徒たちに熱い指導をしてやってください。若い才能を育ててやってください」
「分かった。本当に済まなかった」
洋は男泣きに泣いた。
「お父さん！」
元気な圭の声がしたので、顔を上げると、公園の入り口で圭と、ルナを抱いたミチルが

手を振っていた。
「これから両親に会いに行きます。一緒に住むつもりはないけど、安心させたいし、智樹や智樹のお父さんにお世話になったことを知らせないといけないから…。両親には衝動的に智樹と駆け落ちしたと言うつもり」
「そうか…」
「先生、さようなら」
「活躍期待しているよ」
かすみは一礼して、洋を残して公園を出て行った。入り口でミチルに挨拶をして圭の頭をなでた。圭はくすぐったそうな顔をして笑った。
公園を出たかすみの傍らには智樹が寄り添っていた。

（完）

原稿用紙五十三枚